
俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？（仮タイトル）

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と俺の嫁エウアと召喚獣だと？（仮タイトル）

【Nコード】

N4598Z

【作者名】

K

【あらすじ】

第0話の事前説明を良くお読みください

第4話は火水中（20、21日）にアップします

第4話ではなく閑話として、第3・5話のアップの可能性があります
アップ予定変更がある場合は、早めにお知らせいたします

第0話〈事前説明〉

以下説明を全て読み、読んでもいいと思った方のみ本編をご覧ください。

『魔法先生ネギま!』の世界に転生し、原作を終えて、築いたハレムの嫁達と楽しく暮らしていた…のだが、神が勝手に『バカとテストと召喚獣』の世界に飛ばしやがった!? しかも嫁の1人であるエヴァンジェリンと共に!?

主人公の名前は、ルルーシュ・T・ランペルージ? 『コードギアス』のルルーシュの容姿を持つ主人公であるが、ギアスはもっていないからね?

無駄な能力達…死亡フラグのない世界じゃ、特になにも必要ない!

そんな主人公と、エヴァンジェリンが織成す、まったりとした、文月学園での生活はどうなる…!?

2

更新不定期

誤字脱字の指摘や感想、質問等なんでもお待ちしております

魔法先生ネギま!の原作をご存知の方で、こんなエヴァ見られない!という事がありましたら、お引取りお願いします

魔法先生ネギま!の原作をしっているほうが読みやすい部分があるかもしれません

コードギアスの原作等はしらなくても問題ありません、主人公の容姿、また、名前をお借りしているにすぎないので、知らない方は【コードギアス ルルーシュ】などで検索して、容姿だけ確認していただければ、読んで行かれる上で想像しやすくなるかと思えます

また、不適切な表現や、何か問題があるようなことがありましたら、ご報告ください。確認し次第対応させていただきます

また、個人的にこんな表現が嫌だとか、こんな話しの流れ嫌だというような嫌悪感、また見てられないと思うようなことがありましたら、速やかにお引取りください

作者は物語を書く者としてはまだまだ一般人レベルですので、表現力や、話の転開等しっくりこない部分も多々あると思います、どうぞ温かい目で見ただければと思います。アドバイス等は随時お待ちしております

第0話〜プロローグ〜（前書き）

K「はい、ということでは、行ってきなさい」

?「え？何？何？」

本編開始

第0話〜プロローグ〜

はあ・・・

今度はバカテスか・・・

俺は現在、文月学園近くのマンションの一室にいる

そして俺の目の前にある手紙にはこう記されている

『まいどご苦労ご苦労』

ワシじゃ、ワシ・・・そうー！そうじゃ、生意気な貴様を毎度毎度

転生させていやっている、ワシじゃ』

ワシねえ…ワシさんなんて知り合いいたか？

鷲？

飼ってた記憶はないな

『いや、天界で会った神じゃ

前はフラグ乱立の世界、魔法先生ネギまじゃったの

今回はそういった余計なものは心配するでない
いたって普通のバカとテストと召喚獣の世界じゃからの』

うん…神のおじさんね、あの電波オヤジね

そっぴや、ネギまの世界にいて、無事原作も終わらせて数十年ほど
生活してたと思うんだけど…？

って待て、俺の嫁達はどくなった？

仮契約で、不老不死の効果がシンクロしてたはずだが

現在俺が、別の世界にいるってことは…

『ああ、嫁達のほうは幸せに暮らしておるよ
まあこの世界で100歳ぐらいまで生きて死んでくれたら、向こ
うに戻すからの』

一応、こちらで長期の仕事という扱いで、当分帰れないことを伝
えてあるし

まあ時間系列が異なるから、こっちでの100年が向こうでの一
年ぐらいにしてあるわい』

ほう、なんというご都合主義具合だ

「それは、便利だな」

「うえ？」

気づかなかった、となりに座って手紙と一緒に覗く存在が居たことに

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

俺の嫁の1人だ

「エヴァ？」

「うん？なんだ？そんな驚いた顔をして
その手紙に書いてあるだろう？」

ん？エヴァが指した先には、読んでいた手紙

続きに書いてあるのか

『とは言ってもものう…死んだわけじゃないから、能力調整がで
きんのじゃよ

暴走などもしかねないし・・・ということじゃ、エヴァン
ジエリン殿をお主のストッパー役として一緒にその世界に送っ
ておいたからの

まあ半分休暇とでも思っ
て楽しむがよい』

はあ……

でもよ…この原作って高校だよな？

見た目小学生のエヴァを送ってくるぐらいなら、あすにゃんとかさ
…あると思っ
んよ…っ
てもう言っ
ても遅いな

『ということじゃ、能力制限がついてないからの、その世界での能力使用等は充分注意をはらってくれの…不老に関してじゃが、認識障害で将来的には、違和感をなくして生活してくれの

ちなみにやってもらうことは、特にないのじゃが

その世界の住人2人がたぶん他の神のミスで、魂情報ごと消えてしまったようでの、その埋め合わせなんじゃ

ということじゃ頑張れ B Y神のワシより』

「へえ〜」

「それで、よくわからないまま、変なオヤジに仕事の付き添いとして連れてこられたのだが、ここは別世界なのか？」

ああ、エヴァにも説明しなきゃいけないし

とつかこの時点で俺の名前も俺の特徴もなにも出てきてない気がするし…

まあいいか

「とりあえず、この世界は、そうだな…簡単に言えば旧世界の表の世界のみしかないと考えてくれればわかると思う」

「ほう…魔法はないのか？」

「ないよ、麻帆良のように超人じみた中学生もいないし裏社会というなら、ヤクザ、マフィア、それから外国とかには暗殺を請け負うような本当に裏に準じている人もいるんじゃないかな」

「ほう…それではゆっくりルルと過ごせそうだな」

おお、エヴァ！俺の名をやっと呼んでくれたか

俺の名は、ルルーシュ・T・ランペルージ

あのギアスを使い祖国を潰そうとするあのお方の偽名を、一部だけいじっただけです

何故そんな名前か…簡単です、容姿があれなんですもん

一応身体能力は、全体的に高いと思いますね、ネギまの世界で死線をくぐりぬけてきましたから

その他能力ですが、空間把握能力EX、金運EX、恋愛S（EX）（詳細数値化不可）、脳波伝達速度SS以上、魔力はチートバグキヤラ並、気はラカンほどではないがそこそこある程度、動体視力SSもしくはEX判定、ご都合主義値測定不能、主人公補正測定不能

がそなわっております

そうですね、こんな平和な世界で使うことがあるかわかりませんが、武力的な面でのご説明を入れましょうか

得意魔法属性：全属性　一番適正があるのは闇、次に何故か治癒や結界などの補助魔法の適正が高い

技：カン力法取得済み、居合い拳も可能、京都神鳴流剣技使用可能

武器：特になし

特殊能力：ミリオンゴッド（金運値異常特性）、魔王様（眠い時、もしくはわ眠りを邪魔された時光臨）、ニコナデポ（微笑みながら撫でると発動）、ガッシュベルのテイオの術が使用可能

とまあそんな感じですね、一応武器もありますが、銃刀法違反になるのは嫌なので、影の倉庫に封印します

「エヴァ、これからどうしようか」

「さあな、神とやらのもう一枚の手紙に書いてないのか？」

もう一枚の手紙だと？

はっ！もう一枚あった…

『P S . お主等の戸籍は用意してあるし、特別に、元の世界の貯金から少し降ろして、こちらの世界の銀行に移してある

それと、もちろん、わかっておるじゃろうが、文月学園にかよってもらうからの…でなければ話がすまん

ということ、転入試験は今日じゃからの』

今日だと？

今何時だ…

「エヴァ、今何時だ？」

「神からの荷物に携帯が入っていたから、それで確認したらどうだ？」

神からの荷物だと？

ああ、目の前に普通にあったわ

手紙に気をとられすぎてて視界に入らなかった

中身をあさる

銀行のカード＋通帳（俺名義で一組）、健康保険証（エヴァと俺の）、スマートホン（2台）、現金30万（茶封筒に、『手持ちないと不便じゃろうから、少しおろしておいたからの』と書いてある）

ほう…

「この携帯2台あるが、1台私が持つということか？」

「そうだろうな・・・魔法があるような世界じゃないから、自然魔力が多くないから、念波とかより携帯の方がいいだろう」

「そ、そうか…使い方覚えられるかな……」

そう、エヴァは重度の機械音痴である

原作のエヴァはどうか知らんが

ここにいるエヴァンジェリン・A・K・ランペルジはそうなのである

「まあ仕方ないさ、少しずつ覚えていけばいいだろう?。」

「そうだな、それで、時間を確認したかったんじゃないのか…?。」

「あ、ああ…。」

ん……？流れるにさ、もう時間やばい！遅刻！

Fクラス入り確定！

とかかと思っただが……そんなことはないようだな

ということとで時間があるので文月学園のことを一通りエヴァに教えたのだが

「ふんっ、ならばAクラスという最高の環境で、過ごそうじゃないか！」

「そうだねえ……ってエヴァ、勉強できるの？」

規模が違う、麻帆良での学生時代エヴァのテストの点数は100点満点中60〜75点前後かと思う

一方、こちらの文月学園は、時間内なら問題数無制限だ

「あれは、やる気がなかったし、何度も中学生をやらされていれば勉強なんぞしたくなくなるわ！だが今回は違っただろう？それなら、まっとうに学校にかよってやろう」

まあ確かに数百年も生きてきたからな、そこらへんのよりは頭いいだろう

「エヴァ、総合教科で3000点以上あれば、Aに入れると思うよ」

「そういうルルは……ってお前、頭いいんだっただな」

そう見たいですね、大元のルルーシュさんの頭脳でもうけついでなのでしょうかねえ

「じゃあ3000点以上でがんばろうか」

「そうだな、2人並んで授業を受けたいな／＼」

ええ、妻にしてから、エヴァはちよくちよくデレますね…かわいい・
・
・

第0話〜プロローグ〜（後書き）

K「さて、いかがでしょう、見切り発車過ぎる今回の作品！

ノクターンにあげている小説も更新が滞ってる中…アップしちやった

ええ、前回バカ姫という二次作をあげたのですが、修正がつかなくなり、打ち切りとさせていただきまして、修正しようかと試みたのですが、なんか全然別物思いついちゃったから、アップしちやえ！ということで今回のバカテス二次作あげさせてもらっております」

ルル「それで、主人公の名前こんなんでいいのか？」

K「たぶん？それにミドルネームTだし〜Tだし〜」

ルル「そんなことより、魔法先生ネギまの時の話しはアップしないの？」

K「え？ああ、ね……きつと……いつか……ね……」

ルル「いきなりですが、ご覧頂いた方に、お伺いしたいのです！」

K「したいのです！」

ルル「文月学園の点数の設定なのですが、何点〜何点が何クラスで〜とかいのですね、あれってどんな感じなのかいまいちゃわかってなくてデスネ…教えてください〜！それと、総合教科って、どの教科が含まれて計算されてるの？ってという疑問ですね…お答えいただ

ければと思います」

質問回答募集

- ? 何点〜何点が何クラスで〜という主な目安
- ? 総合教科に含まれている教科

第0話、5話、マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……（前書き）

K「おはよん」

ルル「おはよう」

K「まさかの0話WW原作開始までいけなかった……」

ルル「ちょっとびっくりしたわW」

K「ではでは本編どうぞ」

本編開始

第0 / 5話、マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……

ひとまず、生活に最低限必要なものと、朝食を求め

エヴァとコンビニへ行き、家に戻ってきた

TVもないし、PCもないし……

エヴァは無言で俺の膝の上のり、パンを食べている

ルーテストが終わったら、電化製品を買いにいった、あとは衣類か？

21

この家、寝室にキングサイズのベッドが一つ

リビングにテーブルとソファが二つ

それ以外のものがなにもないのだ

ん？制服くないか？

普通用意しといてくれたりするよね？神のワシさんよ？

『ワシはワシって名前じゃないわい！』

はっ！電波が飛んできた、やはり電波ジジイだったか

『いや、ワシ目の前にいるじゃん？』

ん・・・俺とエヴァのまったりとした朝食の時間を邪魔してきた、
電波である

どうやら、エヴァには現在見えてないらしい

『まあよい、もうとつぶん出てこんわい
制服はと数着の下着、衣類等を、今クローゼットの中に入れてき

たからの

それだけじゃい！もうワシはいく！頼まれても、電波呼ばわりするようなお主の元にはおりてこん！！そいじゃの』

言いたいことだけ言って、スッと消えてしまった神

言いたいことだ言い放っていくとは……まあいい、まあいい、もう電波を受け取ることも数十年はないだろうよ

エヴァと俺は制服に着替え……エヴァのかわいさに雄叫びをあげたのは、悪くない！

とまあここまではいいいんだけどさ、文月学園ってどこよ？

ああ、スマホのマップかなんかで見ればいいか

なんとかたどり着くことができ、職員室にお邪魔して転入試験の意を伝えると、ちゃんと話しがとおっていたようで、黒光りするとても大きい、カクカクした人型ロボットが対応してくれた

「今、クラス分け試験実施中で空き教室がなくてな、補習室で試験を受けてもらう」

「こっちだ、入れ」

なんか入るの嫌だね・・・補習室・・・

「そうだ、自己紹介が遅れたな、教育指導担当の西村だ」

「な、なんだと？ルル、人外かと思ったが、ちゃんとした人間のようだよぞ！」

ちよ、エヴァ、それ口に出しちゃダメだって………

ええと、軽く説教を喰らいました俺も…

ということ、転入試験を受けています

どのぐらいあれば転入試験合格かしらないけど

Aクラス並なら問題ないでしょ

3500〜3800程度にしておけばいいかな

テストしていて思ったのだが、確か原作で姫路が回復試験を行っていた様子があったはずだが

体弱い女の子っていう設定だよな？

なんであんな速度で回答できるんだ？

「そこまで、2人ともお疲れ様
まあはつきりとはいえないが、これだけの問題用紙を積んだよう
だからな…転入は可能だろう
後日、合否を連絡する」

ということでも無事試験終わりました

エヴァも結構解けてたみたいだし、まあ大丈夫でしょう

「エヴァ〜」

「どうした？」

「とりあえず、家電買いに行つて、後日届けてもらつてしよつか」

「そうだな…うーんそつちは任せるから、私は調理器具とか買いに
いってくる」

エヴァちゃん料理得意なんですよねえ

俺に美味しい料理を食べさせたいとか言つて…いや、俺だけに食べ
てもらいたいと…懸命に料理の勉強してたなあ

「そうか、じゃあこれお金で終わり次第連絡つてことで」

「うん、冷凍庫は、ちゃんとマグロー匹入るぐらいのにしてくれ」

ちよつと待て、マグロー匹入る冷凍庫なんて…一般家庭用が売つて
るわけがなかるう？解体したあとのマグロを保管するための冷凍庫
ならともかく

絶対エヴァのことだから、丸々一匹入るものをご所望だ…

「エヴァ？そんなサイズは、業務用ぐらいしかないと思うし…」

「ぬ、そうなのか？んー…じゃあ出来るだけおおきなのに…大きい
と高いものがとれないじゃないか！」

「んー…まあ高いものは俺がとればいいし、気にすることないんじゃない？」

「そ、そうだよな！ルルがいるなら何も問題はないっ！
よし、じゃあ大きいのを買ってきてくれ」

というところで、おじいさんは、家電量販店へ

おばあさんは、デパートへ…

ああ、ヤバイ、冗談でもおばあさんなんて言ったらエヴァにフルボッコされてしまうな

忘れよう

気を取り直して、家電量販店で買い物……

冷蔵庫、TV、HDD内臓BDレコーダー、炊飯器…これは、3、4個買って行ってエヴァが気にいったの使わせるべきだな

えとーあとは、エアコンはあるからいらさないな、ああ、加湿器、空気清浄機、それからPCを二台買って

え、何？ここでネット回線の契約もできるの？え？パソコン安くするの？おお、そうかそうか

後日配送の手続きを済ませいざ終了!

店から出て、エヴァに連絡を…ドン…「あ、すみません」

人にぶつかってしまいました

「ああん?てめえテキトーにごめんなさいして許されるとおもって
んのか?」

はあ……やべえ、何この昔ながらのからみ方みたいな感じのことを
してくる人www

ちょーうけっwww

じゃなかった、ちょーうけるーーはいはい、もういいよね

「すみませんでした。では、急いでるのでこの辺で…」

めんどくさいから下手下手にね

「まったくよお〜さつさとっせろ、ボケエ！」

と、酷い返答を喰らったが、まあ案外素直に帰してくれたな
よかったよかった

エヴァと合流し、一度荷物を家に置きに行つて、夜ご飯は外で食べることにした

「ルル、美味しそうな匂いがする」

何を食べるかと、相談しながらエヴァと町を歩いていると、エヴァ

が突然そんなことをいいだした

「ん……

っ……!!

このっ、匂いはっ!」

「なあ、お前そんなわざとらしいリアクション取るような奴だっただか?」

「コメディー補正【弱】がかかっているせいだろう……気にしないでくれ」

「そ、そうか……ところでこの匂いは……」

「俺には感じないという事は、血か?」

町を歩いて血の匂いがするってなあ……飲食店で使われている肉類の血か?

「……ルル、たぶん厄介ごとじゃないか?」

「ん?」

きゃあっ!

「悲鳴かな？」

「そうみたいだが？ルル、助けにいくのか？」

「そうだねえ、そうしようか」

く美春 Sideく

現在私は、お父さん……じゃなかった豚野郎に追われている最中です

いつものことなので、何故こうなったかなんて記憶にありませんです

「ミハルミハル……サア、パパトホウヨウヲ……」

「気持ち悪い！くんな！豚野郎！！」

「ミーンハーンルツ！！！！」

「私の名前を大声で呼ぶなです豚……きゃあっ！」

私としたことが、つまずいてしまいました

なんとか、体制を整え転ばないようにはしたのですが、バランスを取ろうとした

時に、手を地面に擦ってしまったようで、小さな擦り傷を作ってしまった

〔美春 Side END〕

悲鳴が聞こえた方へ向かうと、制服を着た少女がおっさんに追いかけられている

シーンだったわけだ……

「えうつ!?!」

その少女を抱きかかえ、裏道を使いそこそこスピードを出して走り抜ける

「ちよ、なんなんですか！豚野郎が美春に触れるなんて！」

「なんか文句言われてるんだけど…あれ？助けてあげた側だよな？俺・
・
・

いや、まさか追いかけて襲われるみたいなプレイを楽しんでいたわけじゃないよね？

「あー助けなくてよかったのか？」

「え？ああ、た、助けてくれたのですか…で、でも、降ろしてください！
さい！」

男に触れられているなんて嫌悪感しかありません！！」

そう言えばこのこみたこと…ああ、暴走縦ロールの清水美春か
つていうことは、さっきのガラ・ペティスの店長であるお父さんか？

「とりあえず、少し距離は離れたかな…」

美春を解放します

「二度と触れんな豚野郎！ともつと文句を言いたいところですが、一応助けてくれたことには感謝s「ミハルツーーーーー！！！！！！」したいところですが、逃げなくてはいけないようなので失礼するです」

はあ……そうやってどれだけの時間にげてるのかねえ……その時間を勉強に費やせばまだ有意義な時間だと思っただけど

「キ、キ、キサマガ、ミハルニテヲダス、オロカモノカ……コ
ロ、コ、コ、コロス、コロスコロスコロスコロス……」

「俺敵だと認知された？」

数百メートル離れた位置から全力疾走してくるおっさんが、明らかに俺に対する敵対心を向けてきた

それにしても声でかいな……

「そうですわね、逃げた方がいいかと思えます」

「エヴァ〜木刀か竹刀あるー？」

「？」

俺はエヴァに話しかけたのだが、横で美春は何言ってるのこの人？
っという表情を浮かべている

「木刀でいいか？竹刀だと下手するとあれにはきかないかもしれな
いからな」

ふと俺の横に現れたエヴァに驚いたようで美春は、エヴァを数秒の
間見ていた

木刀をエヴァから受け取り、構える

「ちょっと、何する気ですか？

あんなの相手に出来る人間がいるわけないです！

さっさと逃げるべきです！！」

美春からの忠告は無視して、美春のお父さんと思われるおっさんに
向かって走る

「京都神鳴流 斬岩剣ツ！」

斬岩剣 気を刀に纏わせ斬る技

「コロスコロスコロスッ!!」

木刀と拳がぶつかる

通常であれば、拳の骨が砕け散るところなのだろうが……

受け止められたってどういうことだ……コメディー補正キャラ強すぎだろ

拳と木刀のぶつかり合いが生じる

うーん……まさか魔法を使うわけにもいかないし

「ルル!そいつは明らかに対武器戦の戦闘に慣れている!肉弾戦に切り替える!」

ほう、エヴァちゃんナイス助言

木刀をエヴァの方に投げ、一瞬で手をズボンのポケットに入れる

居合い拳である

居合い拳 手をズボンのポケットに入れて、そこから素早く居合いの要領で拳

を打ち出す技

距離を開きつつ、中距離でも扱える居合い拳を放ち続ける

何発かクリーンヒットしたようで、暴走化したおっさんは気を失い倒れた

「まったく、こんなめんどくさいのがいるとは…」

「ホントだな…こんなの普通の奴には倒せないぞ？殺気も一般人のそれを超えていたしな」

「さて、エヴァ、そろそろご飯食べに行こうか」

「そうだな」

何か忘れているような…

「あの豚野郎を、豚野郎が倒すなんて…

あなた一体何者です？」

あ、美春のことすっかりわすれてた

まさか一般人に木刀とはいえ、斬岩剣を拳で止められるなんて思っ
てなかったから熱くなってたわ……

「ルルーシユ・T・ランペルージ……まあ覚えなくていいよ

あれの処理は任せるよ、君の知り合いみたいだし」

「ちよつ、待ちなs……」

何か言っているが、あのオヤジとはできれば二度と会いたくないの
で、これ以上

関わる事をやめ、さっさと逃げるようにその場をさる

第0 / 5話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと…… (後書き)

K「清水美春との出会い編でもありました」

ルル「人外美春パパはヤバイね……」

K「とまあ、ぶつちやけかいてて、主人公の口調が元のルルーシユにあつてないのが気になるのですが……まあしかたないよね……?」

ルル「どうにか、読者の方には脳内変換していただいて……」

K「さて、話は変わりますが、第0話プロローグしかアップしていないにもかかわらず、お気に入り3件の登録をいただきました。ユニークアクセスは既に200と……想定外に伸びていたのびつくりですね

ありがとうございます。

作者といたしましては…贅沢を言ってしまうほど些細なことでもいいので感想なんかいただけたりすると、嬉しかったです」

ルル「では、この辺で失礼します

ご覧いただきありがとうございます！」

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルジ（旧姓：マクダウエル）… 姓

K「ちやつちやつー」

ルル「はい、こんばんわ」

K「キリが悪いかったり、話しの転開仕方が悪かったりするかもし
れませんが、どうぞご覧ください」

本編開始

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウエル）… 姓

テストを受けて数日後、携帯に合格という連絡が入り

無事転入できることとなった

通学初日・・・文月学園新年度の初登校日

もうすでにこの世界での生活に慣れ、生活する上で不便はなくなっ
たころであった

44

エヴァと共に制服に着替え、文月学園に登校……

学校に近づくにつれ、文月学園の制服をきた生徒が目立ってくる

「なあ、ルル。私達への視線が多くないか？」

いやーそれは仕方ない…エヴァが制服着て歩いてたら、そりゃ見るわ小学生と見間違うかも知れない容姿だし

それに美少女だし

金髪で外国人だと一目でわかるし

注目はエヴァに集中……し、してないだど!?

エヴァへの視線も多いが

何故俺への視線が……いや、少なからず、殺気まがいのものや妬みがまざった視線を飛ばしてくる者もいるな

「エヴァがカワイイからだと思うよ」

「そ、そうなのか? / / /

いや、でも、私にはルルがいるからどうでもいいな」

一瞬戸惑う表情を見せたが、すんなり普段の表情にもどったな…

むしろ、見てくる奴らを睨みつけているような……

数分後文月学園に無事到着

入口には、黒光りする大きなゴツゴツとした人型ロボットが…じやなくて、西村先生がどんと構えて立っていた

「お前達は確か、ランペルージ兄妹だったか？」

名前は覚えてたみたいだけど、勘違いしてるなあ

「違う！ルルと私は配偶者だ、つまり夫と妻だ！
ちゃんと書類に書いてあっただろっ？」

「え？そ、そうなのか、それはすまない……」

エヴァちゃん、兄妹に見られると怒るのね……っていうか俺とエヴァ似てないってww

しかも俺なんて黒髪じゃん？

「エヴァ、まあ落ち着いて」

「うん……」

「ほら、クラスの振り分け結果だ、転入試験の成績が振り分け試験代わりとして代用されている」

名前が書かれた、二つの封筒が差し出された

そのうち一つが俺、もう一つがエヴァのだ

それを受け取り、開くと『Aクラス』と表記されていた

チラッとエヴァのほづを覗くとこちらも『Aクラス』

無事Aクラスになれたようだ

「よかったエヴァも俺もAだな」

「当たり前だ、このぐらい楽勝だ」

と堂々と胸を張るエヴァ

うん、カワイイねえ……

「ところで、ルルーシュの方だが、転入して初めから大変かも知れないが、頑張れよ」

「何がですか？」

何を言ってるんだ？

理解していない俺に気づいたのか、西村先生は俺の振り分け結果の書かれた紙を指差す

『Aクラス』

ん？何？これがどうか……

『Aクラス』のちょっと下の方に、小さくこう書かれていた

『次席』

「はあ？ちよつと待てよ……何故だ？」

「今回二年生で総合教科得点が4000点オーバーなのは、お前とAクラス代表だけだ」

4000点オーバーしたつもりないんだけど……まあいいか

「じゃあとりあえず、こんなところで長話もあれですからそろそろ失礼しますね」

「そうだな、まずは職員室に行って、高橋先生のところへ行ってくれお前達は転校生だから、担任の先生が案内してくれる」

「そうですか」

西村先生の指示の元、職員室を訪ねて高橋先生と合流する

「あなたが、ランペルージ君とランペルージさんね」

もう一度確認しよう

俺の名はルルーシュ・T・ランペルージ

エヴァはエヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）

実にややこしい

「自分の事はルルーシュで構いませんよ、呼びにくいでしょう」

「私も名前で構わない」

「そうですね、では、改めてルルーシュ君、エヴァンジェリンさん、あなた達2年Aクラスを担当します高橋といいます

あとは学年主任も兼任しています

教室まで案内しますので付いてきて下さい」

高橋先生：キリッと真面目そうなメガネをかけたスレンダーな女性
コンタクトにして、髪形を変えたら普通にモデルやグラドルなんか
できそうだなあって思う
美人さんである

一つの教室の前まで案内されると、少々待つように伝えられ、廊下
で待機する

暫くすると入室を許可された

たぶん先に先生自身の自己紹介を終わらせたのであろう

教室に入ると、驚いた

勉強する場所とは思えない設備

わかってはいたのだが、実際目にとるとあまりにも無駄に設備費がかかっていることが見て取れるほど、環境が整えられており、驚愕してしまったのである

「自己紹介を……」

高橋女史に促がされる

「ルルーシュ・T・ランペルージ、何故か一応次席らしいが……この学校のこともよくわからない、皆フォローを頼む

それと、ルルーシュと呼んでくれると助かる」

「エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ、先に言っておく、ルルとは兄妹ではないから間違えるなよ？私はルルの妻だからな！」

うん、西村先生に間違えられた時から、自己紹介辺りで言うかと思っただけど、やっぱり先に宣言しておくんだね

エヴァの言葉にザワ付くなか、1人のメガネをかけた男子生徒が拳手してから立ち上がる

「久保利光という、質問いいだろうか？」

「はい？」

「日本での入籍は、男性満18歳、女性満16歳以上と定められている

僕達は高校二年生。エヴァンジェリンさんの方は、満16歳を超えているとしても、ルルーシュ君の方は、18にはなっていないはずなのだが、どういうことだろうか？」

そうこれだ、だが、日本国内ならの話しだったらだ

「まあ日本国内で入籍したわけじゃないからね

海外だよ、どこでという明確な場所は秘密にしておくが、例えばアメリカは州によって年齢制限が異なるし、スペインでは男女共満14歳、それに年齢制限がない国もあるらしいし」

「なるほど、そうか説明ありがとう」

納得したのかすんなり席に座る

他の生徒達もどうやら納得したようだ

「では、後ろの空いてる席に2人とも座ってください」

高橋先生の指示でエヴァと並んで、空いていた席に座る

「では、皆さん自己紹介を……」

自己紹介長いな……趣味とかさ、好きな物、嫌いな物とか聞いても、覚え切れないだろ普通……

改めて俺の番

って、また自己紹介するの？

「えと、じゃあ改めて、ルルーシュ・T・ランペルージ

とりあえず、そうだなあ…エヴァに危害を加えたり、嫌悪するよ
うな発言をしたら、死ぬと思え……」

いや、俺がやるわけじゃなくて

エヴァにサクッと殺られると思うから、そついう意味での忠告ね・
・

それから少しして、またエヴァの自己紹介

「なんだ？またするのか？

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ

あーそうだ、一つ忠告しておく…ルルの眠りの邪魔だけはするな

……頼むから……」

え？なんでそんな切実な思いを込めて言ってるの？エヴァちゃん…？

1人を除く全員の自己紹介が終わった

最後の1人は、主席である彼女だ

容姿端麗成績優秀

運動神経もなかなか…というか下手すると暗殺業とか、拷問による尋問官とかになれそうなほど

な、大和撫子ということばがぴったりな

黒色ロングストレートのキレイな髪をなびかせる

大人しい少女

霧島翔子である

「…霧島翔子、クラス代表…私だけではできない事もたくさんある、皆その時は協力してくれると助かる」

と一礼

自己紹介が終わり休憩時間

エヴァは、今夜のディナーを何にしようか考えているようだ

さて、俺は…ゲームだな！

N Sでポケモンを……

そう言えばジム戦前でセーブしたんだっけ

と本来持ち込み禁止であるゲーム機を取り出しプレイしはじめ

「ルルルシュ・T・ランペルジ…ゲーム機は持ってきちゃいけ

ないモノ」

いつの間にかスツと俺の目の前に立つ、霧島さん

いやー凄いね…足音一つないなんて

「ゲームのBGMや効果音はOFFにしているし、ボタンのプッシュ音も立てないように押しているし、今は授業中ではない迷惑かけているならまだしも、特に問題はないと思うが……テストの成績が悪いわけでもないしな」

「…ルールはルール…守らなきゃダメ」

「そうか、なら君が隠し持っている、スタンガンもよろしくないのではないかな

確かに護身用と言えば、霧島グループのご令嬢だし、仕方ないと言えば仕方ないし

今の世の中何が起こるかわからないからな

でも、出力が護身用にしては大きいものだと思うのだが、違うかな？」

というか、スタンガンだけじゃなくて、他にも色々持ってるだろ……

一瞬表情が揺らいたが、少し考えたあと、霧島さんはこう言った

「…わかった、私が言える立場じゃないかも知れない
先生に注意されたら、大人しくやめて」

「わかったよ」

大人しく引き下がったねえ

「ところで、霧島さん」

「…なに？」

「眠いんだけど、寝ていいかな？」

「…それは困る、この後授業ある」

「そうか…じゃあ保健室行って寝てるね
先生には、体調が優れないので保健室に行きましたって伝えとい
てね」

「……………」

注意したいのだが、エヴァの『ルルの眠りだけは邪魔するな』とい
う言葉で迷っているのか

それとも何か別のことを考えているのか

黙ってこちらを見ている

「ルルーシュ君、代表をあまり困らせちゃダメだよ」

1人の少女が新たに近づいてきた

「工藤さんか、カワイイ子を見ると、ついからかいたくなっちゃうんだよね」

「あははっ、ボクもそれ少しわかるかも」

彼女は工藤愛子：保健体育の点数が高い

ボクっ娘である

「ぐはっ！！」

おいおい、なんだよ？

すぐそばで、男子生徒の声が聞こえた

いくつかのソファとテーブルを巻き込んで、吹っ飛ばされた形跡がある

エヴァちゃん、力加減し…したけどまだ強かったのね

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストリートをかかわすこともできず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！！二度と私に話しかけるな、下衆が！」

エヴァちゃん…だから忠告しておいたのに

「こ、こんなもやしが俺の一万倍の強さだと？

ふざけるなよ！」

ああ、モブががんばるねえ

って俺に向かってくるのね

よくわからんが

シュパン！

と顎に軽くアッパーを入れる

一般人にどれだけの力を入れて良いものか…

コメディー補正がかかっても、限界があるかなあ？

どうなんだろうか……

コメディー補正って強ければ強いほど

ボロボロになっても、次のコマではピンピンしてたりするよね

うーん、どのぐらい力を込めようか

よし、少しずつ出力をあげていけばいいか

ん？

気が付いたら、男の顔はボロボロ……口と鼻から血を流していた

考えながら、軽くあしらってるつもりが、それでもダメージになったのね……

「ひゃんで・・・きよんひゃ、ひゃひゅひ・・・！」

口元とか頬とかはれて、何言ってるかわからないとか・・・ギャグ漫画で見た以来だなあ

「君から向かってきたから、正当防衛だよ？」

まあエヴァは先に手を出しちゃったかもしれないけどさ

それは許してあげてよ、俺が忠告したのに聞いてなかった自業自得としてさ」

男子生徒は、数十秒硬直すると、突然教室の外へと走っていった

「エヴァ、っていうか、あれ誰？」

「さあな、このクラスの奴ではないと思うぞ、自己紹介の時にいなかったようだしな」

「ありゃ、いなかったの。それなら忠告もなにもしらないわな」

横転したテーブルやソファを元にもどしていく

まったく…いきなりめんどくさいこと…エヴァがカワイイのはわかるけどさ

エヴァの沸点コトによってはかなり低いんだから、やめてくれよな
……

その後、何事もなく一日目終了……

と聞いたかったのだが、FクラスがDクラスに宣戦布告

つまり試験召喚獣クラス間戦争を仕掛けたのである……！

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウエル）… 姓

ルル「いやー、やっと原作キャラ出始めたね」

K「といっても、翔子と愛子と高橋女史が少しずつだけだね」

ルル「優子はまだでなかったね」

K「次回辺りに」

ルル「モブキャラを出させた意味は？」

K「エヴァちゃんが、ルルを愛していることをわかっていたんだけどめに？」

ルル「はあ……俺がゲームをやリだしたのは？」

K「裏設定によるものですね、今回プロフィールのアップは今のところ予定しておりませんが、エヴァがゲーム好きだから、それにつられて、ルルもゲームにはまっているという設定でして……」

ルル「なるほどね」

K「ということ、今回もご覧いただきましてありがとうございます

又、お気に入り件数、PVアクセス、ユニークアクセス共に順調に伸びていること大変嬉しく思います

今後ともよろしく願います」

第1・5話〈第1話のちよつとした裏側〉（前書き）

K「こんばんばんわ」

Eヴァ「ん？なんだ？この空間は？」

K「前書き枠と後書き枠の世界へようこそ」

Eヴァ「『ようこそ』なんてもてなすぐらいなら、お茶ぐらいだせ」

K「お茶こぼして、データ消失すると困るので無理です」

Eヴァ「……まあいい、それで何故私がこんなところに呼ばれたのだ？」

K「作者の気分です」

Eヴァ「ルル……誘拐されちゃった……助けて……」

K「いやいやいやいやいや！！そんなことしてません！とにかくカンペ通り本編にふってください……」

Eヴァ「ふんっ！仕方ない…本編どうぞ」

第1・5話〜第1話のちよつとした裏側〜

〜エヴァ Side〜

文月学園の転入初日、ルルと共に登校したのだが

テストを受けたとき対応した、一見人外と思える男が学校の入口に立っていた

その男は、腹立たしいことにルルと私のことを兄妹だと間違えた

見た目が違つたろう？見た目が！

バカか、この男は…

教師がこれほどなら、生徒も間違える奴もいるかもしれないな

ルルの後について職員室に行き、担任だという高橋女史に連れられ
教室へ向かった

教室の設備の感想は……なんだこの無駄な設備投資は！

という一言に限るな

だがしかし、これほどの設備だからこそ、勉学に励みAクラスに入
ろうとする奴もいるのだろう

自己紹介で、ルルとは結婚していることをしっかりと伝えたいし、問題はないだろう

何故が無駄に二回目の自己紹介では、ルルに関する忠告をしたし

これで静かに暮らせそうだと

休憩時間、夜ご飯のメニューを考えていたら何人かの男子が、声をかけてきた

適当に会話しつつ、メニューに悩む

適当にあしらわれているのにわかったのか、少し会話して満足したのか

1人を除いて立ち去っていった

「っていつか、あんなのどこがいいわけ？」

もやし男じゃんww

君みたいな、か弱い子あんなのじゃ守れないでしょ？

あれとは別れてさ、他の人と付き合えば？俺とかさ？」

最後までしつこく残っていた男は、そう軽く言ったのだ

だがそれは、ルルへの侮辱だ…それに私が、か弱いだと？貴様のよ
うな男より遥かに強いわ！！

咄嗟に拳を突き出した

もちろん、ルルから充分力の加減については聞いていたし抑えたの
だが

抑え方が足りなかったらしい、反応もできず男に拳が当たり

軽くふつとんでしまった

まあいい、ここできつく言っておけば、バカなことと言わなくなる
だろう

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストレートをかわすこともできず、防ぐことも出
来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1
万人いようが、ルルの方が強いわ！！二度と私に話しかけるな、下
衆が！」

そう言い放つと、男は明らかにルルに敵意を向けた

そして、そのままルルに殴りかかっていく

案の定、男はボコボコにされた

ルルは軽くあしらっていたつもりだろうが…

結構ダメージになってるからな………かわいそうに

数日ダメージが体内に蓄積されているだろう

でかいの一発で済めば、意外と表面上のダメージだけだったかもし
れないのになあ

くエヴァ Side ENDく

第1・5話〜第1話のちよつとした裏側〜（後書き）

エヴァ「短かったな」

K「ええ、それに第1話のちよつとしたエヴァ視点だったので1・5話にしたんです」

エヴァ「まあいい、それで私はもう帰っていいのだな？」

K「最後にそのカンペを読んでいただいてから、帰ってくださいね」

エヴァ「えーと……ご覧頂いた方ありがとうございます。第2話は本日月曜日中にアップ致します！」

第2話〜夜ご飯のメニューに悩む少女〜（前書き）

K「1・5話のアップから以外に早く2話の区切りつけたわ」

ルル「いや、その前に挨拶しろよw」

K「あ、こんばんは」

ルル「こんばんは」

K「8割型2話にかけてた状態で1・5話あげたから、早く2話目あげれたよ」

ルル「よかったねえ」

K「うん、いいところで区切りつけたからね」

ルル「では、本編どうぞ」

第2話〜夜ご飯のメニューに悩む少女〜

新年度初日から、試召戦争の戦線布告が、FクラスからDクラスになされた

下位クラスからの戦線布告は、拒否できない決まりがあるらしい

学園側もこれを許可

他のクラスは自習となった

試験召喚戦争か……

Dクラスが今日落とされ

明日明日でBクラスがFクラスの手によって落とされる

明日明日には、Fクラスの余計な策のせいで、Cクラスとの試召戦があるんだっただか？

「…ルルーシュ・T・ランペルジ、ちょっといい？」

霧島さんが話しかけてくるのだが…

フルネームを一々呼ばれている気がする…ファーストネームで呼ぶのは失礼だと思っていて、尚且つファミリネームで呼ぶとエヴァともかぶるから、フルネームなのだろうか…？

「フルネームじゃなくて、ルルーシュでいいよ」

「…そう、じゃあルルーシュ」

「はい、なんでしょうが、霧島さん？」

「…FクラスとDクラスの試召戦争について…私達Aクラスはどうしたらいい？」

へ…？どうしたら？って…？

んー、確か原作でもFクラスとの対談の時、対応してたのは木下優子だったな

戦略立てたり、駆け引きしたりとか苦手なのか？

「何故、俺にそんなことを聞くの？」

「…次席だから、相談しやすいかなって……」

なるほどね……

「…一応、優子とも相談したんだけど、男子の意見も聞きたい」

「優子？」

「私よ、ルルーシュ君」

木下優子：Fクラスにそっくりな弟を持つ、美少女である

成績はいわずもがな優秀

だが、B L趣味を持ち、家ではかなりズボラで、学校ではネコかぶりな少女

「木下さんか：まあどう考えても、Dクラスを攻めた以上、上まで狙ってくると思うよ」

「なんでそういいきれなのよ？それよりもまず、FクラスがDクラスに勝てるわけないじゃない」

「単に設備向上のみを狙うなら、Eクラスでしょ
今の召喚獣に適応される点数は振り分け試験のもの、順当に考えて、初日に二つ上のDクラスに仕掛けるなんて、点数差でどうがんばっても負ける」

聞いた話によると、単教科高得点者で450〜500点代：点差で考えるなら5人で囲めば充分倒せると思うし、そんな逸材Fクラスにそこまで転がってるとも思えない

操作性が高い人がいても、点数低ければ、こちらもうまく対処すれば問題なし

ほら、Dクラスに攻め入る手札が足りないでしょ…」

「そうね、普通に考えて成績もあがるようなこともない、初日からFクラスがDクラスに攻めるなんてありえないわね

何故Dクラスに攻めて、何故ルルーシュ君は上まで狙ってくるなんていいきれなの？

その説明で、FクラスがDクラスに勝てると思えないんだけど…」

「Dクラスに攻めた理由、単純明快だよ…圧倒的な点数を持つダークホースがいるか、Fクラスの代表は、それなりに頭がきれる策士か、Dクラスの代表が策士として底レベルすぎると判断できる為かそこら辺かな？俺は、去年からいるわけじゃないから、他の生徒の事は詳しくないけど、去年上位にいたのに今年は見ない子とかいまいかな？」

普通に考えて、一年の時次席クラスの成績を持つ姫路の存在がいまいことぐらい、Aクラスの連中ならわかるだろ

「…姫路瑞希」

「ああ！そういえば、見てないわね…」

「心当たりがあるのかな？」

「ええ、学年次席もしくはわ三位程度の成績を持つ、姫路さんっていう子がいるのだけど、彼女なんていうのかしら、か弱いというか病弱というか、すぐ体調を崩してしまうらしいの」

「本当に、Fにいるかは別として、難なく倒してくるんじゃないか

な？それと何故Fクラスが上、つまりAクラスまで来るか…

調子に乗って、Aクラスまで倒せるんじゃないかと言う考えにいたる人間、いるんじゃないかな？Dクラスを倒した時点で、二つも上のクラスを倒せたという自信に繋がり、士気のアップにも繋がる。そして、この文月学園のシステム上、単教科高得点者が何名かいる可能性はあるし、ダークホースの存在の可能性もある

それに観察処分者という者もいると聞く、そこへ策士がいるのであれば、Aまで来るよ…戦争は純粋な力（点数）だけじゃないからね」

「観察処分者という言葉がでたのがびっくりだけど、それは何故？」

Aクラスって、勉強できても全然頭はきれない連中なのかな…？

「観察処分者、フィードバック…つまり、召喚獣との感覚リンク率が高い仕様がついている

召喚獣がダメージを受ければ、本体つまり肉体がダメージを受ける

それなら、ダメージを受けないように、操作性をあげるしかないだろう？

教師の雑用もされていると聞く、練習は充分施されてるんじゃないかな？」

「なるほど」「なるほど」

気づいたら、久保君と工藤さんも一緒に話を聞いていたようだ

「それじゃあ、Dクラス戦終了後、Fクラスが攻めてくるというのかい？」

「いや、Fクラスじゃあどうがんばっても、Aクラスには勝てないよ……」

久保君…君はいきなり参加してきて、いきなり質問を飛ばすのかい？
まあいいか……

「「「え？」「」「…？」

「霧島さん

「…なに？」

「君にとっての弱点や、それになりそうなこととかあるんじゃないかな？」

それをFクラスの代表か、親しい者が知っている…それなら落とせる可能性があるかと踏むんじゃないかな？」

「……。」

何かを考えているのか、霧島さんは無言である

助け舟を出すかのように、工藤さんが声をあげる

「でもでも、弱点を知っているからなんなの？」

「一騎打ちに持ち込んだらどうする？」

「それで、代表の弱点をつくっていつの？」

「そうだね」

「そんなの飲まなければいいじゃない？」

確かに、このままなら飲まなくてもいいんだが

「そのために飲ませるように布石を打つ…」

「」「」「布石？」「」

「例えばだ…戦争でもしFクラスに負けて、設備入れ替えとなった…だが『設備は入れ替えなくていい、そのかわりにちよつとしたお願いを聞いてくれないか？』そう言われたら、どうする？」

「お願いにもよるけど…たぶん受けるわね」

「それで『Aクラスに試召戦争の意思があると思わせてほしい』も

しくは、『合図を出したらAクラスに宣戦布告し、試召戦争を仕掛けて欲しい』そういわれたら？」

「負けても、設備はワンランクダウンになるのね…それなら受けるとこだけど、Fクラスに負けているのなら、3ヶ月は宣戦布告できないはずよ？」

「表向きには、和平交渉による終戦ならば、問題ないんじゃないかな？設備入れ替えはしないわけだし」

「それで？」

「例えば、Dクラスと…そうだなCクラスかBクラスかなその2クラスと、そう言った取引を行う…そして、Aクラスとの交渉対談にて、それをちらつかせ、一騎打ちに持ち込もうとする

それならどうする？Aクラス、決して文武両道のような人選が揃っているわけでもない、体力的問題もある…

他のクラスとの連戦後、Fクラスに攻め込まれたら？確実に勝てる保証は？」

「なるほどね…理解できたわ」

「…説明ありがとう、ルルーシュ」

まったく、長々と無駄な話しを……いつその事適当に流しておけばよかったか？

数時間後、Fクラス対Dクラスの試召戦争は、Fクラスに姫路さんが居て、Fクラスが勝利したものの、和平交渉にて終戦という話しが流れ始めた

「……ルルーシュの言ったとおりになった」

ツ……!!

ホント、気配もなく、足音もなく急に出てくるのやめてほしいわ……

俺でもびっくりするわ

「そうだね」

「…それで、Aクラスはどうしたらいいと思う？」

「んー、エヴァはどうしたらいいと思う？」

隣の席に座るエヴァに話しかける

先ほどはまったく話につっこんでこなかったので、声をかけてみた

「そんなことはどうでもいいんだ

今夜のメニューが決まらないんだが、ルルはハンバーグとトンカツどっちがいい？」

どうでもいいのねww

まだ夜ご飯のメニューに悩んでたんかいっ！

「そうだなー、トンカツかなあートンカツ、キャベツ、味噌汁、ご飯！これでいいでしょー」

「ん…そうか、わかった」

「……」

ジーツと無言で俺とエヴァの方を見ながら会話を聞いている霧島さんである

「ああ、ごめんごめん

そうだね、別に何かしたいなら案はあるけど、別に何もしなくてもFクラスに負ける事はないよ？現状ではFクラスに出来る事は限界があるからね

それにFクラスに負けた後の、少なからず弱体化したクラスに攻め入られるとしても、大した問題はないよ…まあフォローできるときはするから、ドンと構えてればいいよ」

「…わかった」

その日は、その後何事もなく終える事ができた

しいて言うなら、エヴァの作ったトンカツが最高だったことぐらいだろうか

サクサクうまあ〜ですね

翌日

午前中は穏やかに過ごすことができたのだが

午後からFクラスがBクラスに試召戦争をしかけるといっ…

「ルル、また今日も自習なのか？」

「FクラスがBクラスに試召戦争しかけたんだって」

「そうなのか、夜ご飯のメニューだが…今日は、蕎麦とうどん迷っているんだが、どっちがいい？」

また夜ご飯のメニューかWW

「そつだなあ…天ざる蕎麦が俺が一番好きだよ」

「そつか！じゃあそれにしようっ」

うちのエヴァ、朝から夜ご飯のメニューばかり考えているんだけど…何故？w w

一番時間に余裕あって、凝ったものが作れるからか？

さて、Fクラス対Bクラス戦は翌日に持ち越しとなった

Bクラス代表の小物君じゃなかった、根元君は卑怯やイカサマは手段のひとつという小悪党の鏡！

何かやらかしているようだが…

干渉はやめておこうか

その日はエヴァが張り切って、蕎麦を打つところからはじめたせいで、夜ご飯の食べる時間が遅くなった程度しか特筆するようなことはないな

そつだな・・・他にあげるとするならば

俺はキスの天ぷらが好きだ！

キスっていう白身のお魚ね

天ぷらにすると美味しいんだなあ〜これが

ああ、こんな会話をエヴァとしたぞ

「それで、ルル…試召戦争だったか？どうするんだ？何かやるのか？」

「そうだねえ… Aクラス… Bクラス… Cクラス… Fクラス… どうしたものかね」

「まあ私もあの設備から低くなるのは嫌だからな……」

「そうか……まあなるようになるさ」

「そつだな……」

朝日が昇れば、騒がしい二日間が始まるであろう……

Cクラス戦… Fクラス戦…

第2話〜夜ご飯のメニューに悩む少女〜（後書き）

PVアクセス約3500 ユニークアクセス約750 お気に入り
10件突破！

K「ありがとうございます！どんどん、お気に入り登録してやって
ください！

評価や感想もお待ちしております」

ルル「ありがたいね」

K「ホントホント…欲を言うなら…．．．ランキングに乗りたいた
て思ったり」

ルル「ランキングね、一気に見てくれる人増えそうだもんね」

K「うんうん…ということ、どんどん見て、どんどん評価して、
どんどん感想ください！お待ちしております！！」

末筆で申し訳在りませんが、ご覧いただきありがとうございます
次回も早めにアップしたいと思います

第3話「TはTeaなんですよ、そう紅茶…」(前書き)

K「こんばんばん」

Eヴァ「こんばん・・・って何故また私がここに呼ばれた？」

K「今回出番ほぼないから」

Eヴァ「なんだと？」

K「にらまれても…ふえないの！今回はルル、優子、友香回なの！」

Eヴァ「そ、そうか…まあルルが活躍しているなら・・・いいか・・・」

K「ということまで本編どうぞ」

第3話「TはTeaなんですよ、そう紅茶…」

Fクラス対Bクラスの試召戦争二日目

教室につくと真っ先に、霧島さんの元へ向かう

「おはよう」

「…おはよう」

霧島さん今日も綺麗だねえ

ってそんなことを思ってる時じゃないな…

「ちょっと木下さん借りて、Cクラスに行っても良いかな？」

「…どうして私に聞くの？」

「試召戦争の火種になる可能性があるから、一応ね」

「……………気をつけて」

いつもより長い沈黙の後霧島さんは承諾してくれた

「ルル、私もついていくか？」

「いや、まったり座ってていいよ」

「そうか」

エヴァは俺の言葉に頷き、自分の席に座る

俺はそのまま木下さんの元へ

「おはよう木下さん」

「おはよう、ルルーシュ君

どうしたの？わざわざ挨拶しに近づいてくるなんて？」

少し驚いた表情をしている

「ちょっと俺につきあってくれないかな？」

「え？エヴァンジェリンさんも教室にいるのよ！？何考えてるのよ？／／／」

いや、お前が何を考えてるんだww

「Fクラスとの試召戦争に関わることだよ」

「え？ああ、そう。わかったわ」

木下さんを連れて、Cクラスに向かう

確か朝だったよな、Fクラスの秀吉女装作戦は……

Cクラス前まで来たが、今のところ気配は近くにないな

コンコンと軽くドアをノックして扉を開ける

「すみません」

「はい？」

1人の女生徒が反応し、こちらを向く

「Aクラスのルルーシュ・T・ランペルージといいます。Cクラスの代表さんに話があったて来たのですが……」

「代表は私よ？」

対応してくれた人が代表だそうだ

「Cクラス代表の小山よ、それでAクラスの人がなんの用？」

「ただのご挨拶です、Aクラスの次席になったのですが、今年転入してきました…一応顔くらい知っておいた方がよいかと思ひまして、こちらのクラスメイトである木下優子さんに案内していただいたのです」

「ああ、そう。」

「Aクラスの木下優子よ、よろしく。」

「ええ、小山友香よ、よろしく。」

ふむ、とりあえず何事もなく挨拶ができたね

「いやあ、うちの代表はキレイですが、小山さんはカワイイですね…」

「そう？お世辞ならいらないわよ」

「ああ、普通に可愛いと思いますよ、嫌いな人には嫌いって言うち

やうタイプなんで、お世辞とか言えないですね…例えば、Bクラス代表のド3流策士の小物とか……」

「あら、そのド3流策士の小物が、一応私の彼なのだけれど？」

小山さんがそう言った瞬間横にいる木下さんの表情が、こわばる…

「そうでしたか…知らずとはいえ、彼女さんに彼氏さんを蔑む言い方をしてしまいましたね…すみません。まあ本人が居ても直接言ってしまうでしょうから、大して意味はなさない謝罪ですけど、自分も大切な人を悪く言う奴がいたら怒っているでしょうからね……喧嘩をしにきたわけじゃないので、怒っていらっしやるなら、どうかそれを収めて欲しいのですが……」

「ま、まあ、別にいいわよ……あなた次席っていったわよね？」

よかった…案外彼氏の事に関しては、カツと怒るような人じゃないのかな？

「ええ。たまたま、『間違えているだろうけど！』と思った問題達が当たってたようで…本来ならAクラス上位程度で収まるはずだったんですけどね。それに姫路さんが、実力通りAクラスに居れば、次席なんて場所に納まってませんよ…ふふっ」

「たまたまでも凄いわね……」

「そうだ、小山さん…演技って興味ありますか？」

「演技？ええ、そうね…んー自分がやるのは得意ではないわよ…見
てるほうが好きね

映画でもドラマでも舞台でも」

「見るのは好きですか、どうですか？今度是非、彼氏さんに内緒
で舞台か映画でも……」

「嫌よ…なんで初対面のあなたとそんな約束しなきゃいけないのよ
……」

「あはははっ、ですよねー…ああ、そういうば、木下さんの弟さん
って演劇部で優秀だとか？」

「え？ええ、そうみたいよ。なんか声真似？ができるみたいだし」

「へえ…声真似でもすごい人は声帯模写といってカンペキに声を似
せることができるらしいですね……」

「それは凄いわね……そんな弟君は、何クラスなの？」

「さあ…演劇バカだからFクラスだったと思うわよ？」

「そう……」

「弟君って木下さんにそっくりなんでしたっけ？」

「ええ、そうね…」

「それなら、女性用の制服着て声真似なんかしたら、喋っていても気づかないかな……木下さん、ホントにお姉さんの方ですか!？」

「え?当たり前でしょ!？」

若干、木下さんの怒りのボルテージがあがったようだ

「そ、そんなこと言って、出会って間もない自分なら、からかえると思っ
て入れ替わっているんじゃない?？」

「違うわよ!！」

「じゃあ…そうですね…小山さん、木下さんがホントに弟さんの女装姿でないか、確認してもらえませんか?からかわれるのとか嫌なんですよ……まさかホントにお姉さんのほうだったら自分が確認するわけに
いかないですし………」

「え?はあ…私はいいけど」

「ルルーシュ君、一体さつきからなんなのよ…まったく……まあいいわ

小山さんちよっと…」

木下さんは小山さんを隅へ連れて行き、制服の胸元を少し開いて、

胸があることを確認させたようだ

「ちゃんと女性だったわよ…まったく」

「私はちゃんとしたAクラスの木下優子よ…まったく」

女子2人から『まったく』と呆れ顔で見られてしまった

「あはははっ……いやーだって木下さんとは今日で会っの三回目ですし、弟君の方は会ったことないですし……そんなに似てるなら、見分けつけられないですよ……」

そつだ！合言葉決めましょうしたら、わかるでしょうっ？」

「はあ…そうね…もうなんでもいいわ」

「ねえ、木下さん、このルルーシュ君ってこんな自由な子なの？」

「え？んー結構自由かもしれないわね」

え？そう思われてたの??

「じゃあ、そうですね、小山さんにも特別に自分のミドルネームのTがどういう言葉のTか教えますねそれを知っているのは、ほんの一握りの人間しかいませんから、合言葉になりますから」

「ええ、それでいいわよ」

「そうね…確かにTの意味が気になっていたけど…」

木下さんはミドルネームのTの意味を気になってくれていたようだ

「紅茶の英語表記のT e aのTですよ、飲み物の中で紅茶が好きです」

「え？そんな理由でそのミドルネームなのっ!？」

「というより、ミドルネームもフル表記しても、発音はティーのままなんだ…クスクスッ」

上が木下さん、下が小山さんのリアクションである

「はい、あ、結構長いしちゃいましたね、そろそろ失礼しましょう。木下さん」

「そつね。」

「では、小山さんまたお話ししましょう」

「ええ。くだらない話しもあつたけど、たまにはいいわよ」

俺は、立ち去る前に、小山さんにこつそり声をかける

「もし、木下さんと思われる人が今日中にきたら、相手の話に乗つたふりをしてください。そして、Aクラスの自分のところへ報告にきてください…できれば構いません

お願いします。」

それだけ言い残して、その場をさる

俺と木下さんは、小山さんと接触することができたし

弟の話もした

そして、念のための確認するための合言葉も伝えた

もし最後の言葉どおりに動いてくれなくとも、女装した秀吉がきて確認をとれば、Aにはせめてこないだろう

Aクラスに戻り、霧島さんに、あとはFとCの出方次第とだけ伝え席に戻る

「ルル、大丈夫だったか？」

「転ぶ方向は二択、Cクラス代表が、Fクラスに怒りを覚えるか…
Cクラス代表がこちらに敵意がない状態でここにくるか…まあこち

らに敵意を持ってきた場合は、ああ残念っていうだけだろう」

暫くすると、Cクラス代表の小山さんが数名をつれて、Aクラスに乗り込んできた

「Cクラス代表の小山よ！木下優子を今すぐ呼びなさい！！」

怒鳴ってるねえ……

Aクラス内が騒然となるなか、木下さんとそれに続くように霧島さんが向かう

「何かしら？」

「さつきはよくも散々な事を言ってくれたわね！…とりたいところだけど、ルルーシュ君も呼んでくれるかしら？」

ほづ……乗せられているふりをして、ここまで来たか

「さつきぶりですね、小山さん」

「ええ、あなたが最後に残していった言葉の意味、それからやけに意図的に何かを伝えようとしていた会話から、あのクズクラスの奴が来ても気づくことができたわ

まあ、一応言われた通り、乗せられたふりはしたけど…？」

「え？なんなの？」

「一応確認なのだけどあなた、木下優子さんでいいのよね？」

「え？ええ。」

「そう、あなた紅茶は好き？」

小山さんの質問に朝のやり取りが一瞬あたまをよぎったのか、ほんの少し間が空いてから木下さんは答えた

「そうね、T e aはよく飲むわよ」

数秒小山さんと木下さんの目が会う

「本物ね…さつきFクラスのあなたの弟が、あなたのふりをしてCクラスに乗り込んできて、散々罵倒して行ってくれたわよ」

「なっ！そうだったの？愚弟がひどい事を言っでごめんなさい…」

「いいえ、別にいいのよ」

ルルーシュ君の働きがなければ、Aクラスの木下さんに言われたと勘違いして、何も考えずにAクラスに試召戦争をしかけることになりそうだったから…」

「え？もしかして、今朝ルルーシュ君とCクラスに行ったのってまさか…？」

小山さんと木下さんの視線がこちらに移り、それと同時に周囲の視線も移る

すーく注目浴びてるんですけど…

「初めから小山さんがCクラス代表なのは知っていたし、わざわざ木下さんを連れて行って、脈絡もない自由な話しをしたのは、これの為だよ…まあ小山さんがうまく俺の言ったとおりになってくれたからこそ、穩便に話しを進められるんだけどね」

「それで、この通り乗せられたフリして、ここまで来たけど、どうしたらいいのかしら？」

「霧島さん、試召戦争に関わるコトです
代表としてあなたも挨拶してください」

「…Aクラス代表霧島翔子」

「あなたが…私はCクラス代表の小山友香よ」

ひとまず、対談の場を儲け席につく

「さて、先に俺の目的から話しましょうか…」

簡単ですよ、Fクラス代表の思い通りに学年全体が引つ掻き回されるのが気に喰わないだけです。だからこちらに飛んでくる火種を、意図的に潰したかったにすぎません。

本来であれば、たぶん今頃Aクラス対Cクラスの試召戦争で互いのクラスが準備を行っている頃でしょうから」

「それで、Cクラスに何を求めるの？」

「単純明快、Fクラスの思惑に乗ったと見せかけて、Aクラスに戦線布告していただきます」

「「え？」」「…？」

話を聞いていたAクラス連中がザワつく

「そして、Aクラスの召喚獣の操作スキルをあげる為の練習台になつていただきたい」

「練習台？」

「ええ、そして、最終的にはCクラスの負けという形で終わっていただきます」

「ちょっと待ちなさいよ、それじゃあCクラスの設備が下がってしまっただけじゃない?」

「和平交渉で終わらせるんですよ、Cクラスの設備を下げたところでメリットはない」

だが、しかし、勝敗が決まりそうにないから和平交渉にしたんだろ?と思われて、Aクラスに攻めるバカ連中が増えても困りますなので、一度最終的に小山さんには討ち取られていただき、和平交渉でその他リスクは失くすと……」

「口約束で、そんなこと受け入れられないわ」

「そうですね、では…仕方ない、帰っていただいても構いませんよ」

「な……どうゆうことよ!?!」

「いえ、だから、何事もなく教室へおかえりいただいて結構ですあくまで今回Cクラスとの接触は、戦争回避か友好関係を築いた上での召喚獣の練習相手、どちらかになれば問題はないのですから…小山さん自身、冷静に考えれば、今の新学年始まったばかりでの試召戦争でAクラスに勝てる手段がないことぐらい、理解できてるはずです」

友好関係が築けなくても、無駄に宣戦布告するなんて愚の骨頂なまねしないでしょ?」

「確かにそうね……わかったわ、あなたを信じましょう
実際事前に種をまいて置いてくれたおかげで、無駄に戦争を起こして設備を下げる結果に至ってないのだから」

「はい、ではそれでいきましょう。ただCクラスにメリットがないですね」

「いえ、事前に情報を与えてくれたおかげで、こちらが散々な目にあつてないことでも充分だわ。それにFクラスの手のひらで踊らされるような真似には、なつてないわけだし」

Cクラスの皆にはつたえておくわ、それに私達としても召喚獣の操作性をあげるために実戦は必要なもの」

「そう、じゃあそれでいいかな？霧島さん？」

「…私は構わない」

「じゃあ交渉成立ね、ではCクラスはAクラスに試召戦争の宣戦布告をするわ」

交渉成立かに思えたとき、Aクラスの生徒から声があがる

「ちよつと待てよ、何故わざわざ試召戦争をする必要があるんだ？」

明らかに不満を意する、口調であつた

「あーそうだな、Aクラスの人の中には、こう思っている人もいるのではないか？『点数高いから大丈夫』、『俺達はAクラスだぜ？』
『どのクラスに攻められても点数高いから負けるわけがない』」

甘いよ、布石を積み、策があり、操作性が高ければ、点数が低く

ても

Aクラスは討ち取れる

いいか、テストの問題の正解は一択とは限らない……それと同じで、試召戦争も点数一択で勝ち取れるとは限らないんだよ
頭がいいと自負するなら、そのぐらいわかってくれ
その点数の自信だけでは、足元をすくわれるぞ」

そう俺は言い放ち、Aクラス連中を見渡す

「何かいいたいことがある奴はいなさそうだな…
では、改めて、小山さん…」

「ええ、CクラスはAクラスに宣戦布告します」

「…わかった」

こうして、Aクラス対Cクラスの試召戦争の舞台が整ったのである

第3話「TはTeaなんですよ、そう紅茶…」(後書き)

K「はい、ということではいかがでしたでしょうか、第3話

ご都合主義全開の交渉回となりました」

エヴァ「うー何故私を、交渉の席に呼ばないんだ!」

K「いや、エヴァって、交渉ごとで下手に出るようなキャラじゃないじゃん」

エヴァ「く……そのぐらい設定を変える! 変えるんだ!」

K「そのメタ発言はヤバイと思うよ……w」

エヴァ「まあ仕方ない、もっと私の出番を増やせ! いいか、ルルと私の絡みをもっとだ!」

K「機会があればね…とまあエヴァの相手はこのへんで終わりにして…」

PVアクセス5600突破 ユニークアクセス1000突破 お気に入り件数13件 文章・ストーリー評価0件 感想等0件

ありがとうございます!

評価と感想がないのは痛いのですが…

まあ評価は始まったばかりでつけられないとか…わかるのですが

感想が一切こないのは何故なんだあああああ!?!?!?!?

という疑問を抱いております

よかったです、感想等お待ちしております!

ご覧頂きありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598z/>

俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？（仮タイトル）

2011年12月20日02時56分発行